



第 37 号
発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院
人文科学研究科・旧文理學
部文科学科 同窓会

(事務所)
〒753-0831 山口市平井773-2
沖田ビル202
電話・FAX 083-928-4527
郵便振替口座 01500-4-15902
<http://koubun.la.coocan.jp/>
メール:kobun1981@ybb.ne.jp

第10回 鴻文会総会

期 日 平成29年8月26日(土)
山口大学 大学会館において開催

鴻文会会長に就任して



鴻文会 会長
内田 光邦

べることにはなりますが、これまでの事業を振り返りつつ、いくつかの事項を列挙して今後の努力の指針とさせていただきます。

まず第一に、会報「鴻文」を紙媒体で(電子媒体ではなく)皆様のお手元に年一回お届けします。(ホームページにも載せます。)

折角発送した会報が残念ながら宛先不明で返却されることもあります。このような事態を解消し、また、会員相互の親睦に資するためにも、個人情報の取扱いには格別に留意しつつ、役員、努力と会員各位のご協力を得ながら名簿の更新に努めます。

更には、人文学部をはじめ山口大学との良好な関係を引き続き維持し、在学中の学生の支援にも努めて参りたいと思います。

また、現在の趨勢に鑑み、ホームページによる情報発信を一段と強化し、鋭意情報の更新に努めることが喫緊の課題になります。

鴻文会の財政状況については、決して楽観できるものではありません。それを改善するため、記念すべき第一〇回総会を機に、岡光前会長名で会員の皆様方に「特別寄付金」のお願いがなされました。寄付金の状況と寄付をお寄せいただいた方々の御芳名は、本会報の別の項でご報告申し上げておりました。財政の状況については「無い袖は振れない」という事実もありませんが、「貧すれば鈍する」にならないことも必要でしょう。今後とも、「入るを量りて出するを制す」に努めます。また、各年度の決算・予算については、会報で報告しております。

初代会長の和田敏英先生を初めとして、歴代の錚々たる会長の後を引き継ぐにはその任は余りに重く、恐怖にも似たものがあります。自分のような者に役が回ってくるほどに鴻文会は人材が払底しているわけではありません。現実には、役をお願いすることが無理な方もいらっしゃるかもしれません。県外で八面六臂の活躍をされている方、自分や家族の病気や介護で多忙を極めている方、過労死ラインまで働いていらっしゃる方等、色々な御事情が御ありのようです。この組織にも、人材は常にあるけれど、それを発掘するように機能できていないという事情もあります。これから四年後を見据えて人材の発掘にご協力をいただけないでしょうか。

創業と守成はいずれが難いかと言われますが、今ある鴻文会に、新しい事業を加える力量はないまでも、継続していくこと(＝守成)が大切であると考えています。これまでにも実行していることですから、繰り返しの意見を述

ところで、人は挫折したり、人生の節目を迎えたりする時に、学生時代を振り返ることがあります。それは単なる回想ではなく、そのことを通じて自分の位置を確認し新たに生きるための視点やパワーを得ることに繋がります。また、私たちは陰に陽に先輩諸氏から恩恵を受けて生きてきました。その恩恵の何分の一かだけでも次の世代に与えていくことが、定年退職後の世代の務めであろうと思います。

人によりかなりの違いはありますが、誕生してから大学を卒業する頃まで、二〇年余りは親を初めとしていろいろな人の世話になります。その後、定年退職まで四〇年位は、職に就き、家庭を築き、次の世代を育てることを通じて社会に貢献し、定年退職を迎えます。その後二〇年位は、ボランティア活動として地域社会の様々なお世話に携わります。また、要請があれば、できる間は引き受けて「林住期」の期間を過ごしたいと考えます。私自身このような人生の一環として、鴻文会の役員への就任を位置づけているところです。

ハチドリについてよく知られている、アンデスの寓話があります。山全体が火事の炎に包まれているときに、小さなハチドリはその嘴で水を運び、消火に努めようとしています。他の動物たちはこの姿を見て「無駄なことだ」と言います。私たち役員の仕事もこのハチドリのいなみの如きものかも知れませんが、自分にできる努力を続けていきたいと考えています。

会長に就任したことにより、これから四年間を生きる目標を与えられたと考えて皆様に感謝しつつ、健康に留意しながら、役員として二度目の大学生活を楽しみたいと考えています。

(文理第一五回卒・英米文学)

鴻文会 特別寄付金のご協力 ありがとうございます

第一〇回鴻文会総会開催を機に、財政支援のための特別寄付金をお願いしましたところ、平成二九年一月三〇日現在で、一四八名様から七七八、〇〇〇円の寄付金をお寄せいただきました。本紙面を借りまして御礼申し上げます。今後、より一層の経費削減の努力と同窓会としての活動の充実に努めてまいります。



第一〇回総会・特別寄付金者

(順不同 敬称略)

- | | | | |
|------|------|------|-------|
| 沖中武志 | 小林茂樹 | 白石重昭 | 吉野沙耶香 |
| 長瀬悦子 | 生野龍二 | 中島信彦 | 小篠美智子 |
| 吉賀孝幸 | 濱村祐子 | 竹口佳世 | 荒谷寿美郎 |
| 栗田憲一 | 吉川敏子 | 吉田康淳 | 細山田康弘 |
| 中垣八朗 | 安田健三 | 武林寿子 | 鈴木千登世 |
| 松岡嘉彦 | 大谷泰子 | 松尾龍彦 | 徳田美由紀 |
| 清水康裕 | 江見伸子 | 秋村寛之 | 土井喜代志 |
| 大森保典 | 中尾哲雄 | 行村和男 | 添田建治郎 |
| 樋口尚樹 | 原口公康 | 中島康吉 | 武居スミヨ |
| 野村悦子 | 大塚博久 | 山崎幸子 | 田代枝理子 |
| 大西香苗 | 野村明夫 | 伊豫英城 | 榎本美由紀 |
| 中野文男 | 森重祐二 | 岡ゆみこ | 木村比沙子 |
| 後根弘子 | 生田暢子 | 江川大器 | 山口多賀子 |
| 富田一彦 | 桑田敬子 | 森松明子 | 戸谷美代子 |
| 奥田和子 | 柳浦俊静 | 秋竹泰雄 | 椎野由紀子 |
| 渡邊早苗 | 土井透江 | 溝部忠増 | 伊本由岐子 |
| 木下正俊 | 岡崎博之 | 野口眞澄 | 六百田麗子 |
| 野嶋邦子 | 永見政道 | 梅田洋二 | 中村稚恵利 |
| 長村真吾 | 横山永三 | 宮藤隆夫 | 井上真理子 |
| 岡村君子 | 福田美紀 | 高崎淳子 | 城村ひとみ |
| 本田義昭 | 江浪香織 | 新谷國宏 | 木下由紀子 |
| 井上和男 | 江崎和子 | 中島光行 | 重中十士明 |
| 三浦真希 | 岡光一浩 | 小山良昌 | 八田彰 |
| 井町頼信 | 原田美涼 | 松崎公彦 | 尾崎徹 |
| 田中澄子 | 登城孝胤 | 品川道昭 | 田中晋 |
| 品川晶子 | 藤井日正 | 宮崎祐子 | 奥間茂 |
| 藤澤真弓 | 原田雅子 | 内田光邦 | 亀高萌 |
| 久保雅美 | 和崎睦子 | 山田佳子 | 高橋稔 |
| 大野光生 | 吉永睦美 | 弘中幸子 | 青木寛 |
| 井上基子 | 井上範子 | 弘中榮二 | 菊谷進 |
| 藤岡悦子 | 山岡典子 | 大江清子 | 要貴志 |
| 宮原省吾 | 倉重雅子 | 賀来孝代 | 山田毅 |
| 小谷典子 | 井本正彦 | 浅野靖 | 齊藤禎 |
| 金山勉 | 山本力 | 村田博 | 栗原宏 |
| 郷原祥 | 林 顕 | 林 勝 | |

第一〇回鴻文会総会・懇親会報告

副会長 渡邊 早苗

この度の鴻文会総会は、第一〇回の記念総会ということで、大学キャンパス内で開催することになりました。平成二九年(二〇一七年)八月二六日(土)、山口大学学生会館において第一〇回鴻文会総会が、学生食堂にて懇親会が開かれました。

総会に先立ち、人文学部と地域連携課の協力を得て、人文学部内を加えた特別コースの「キャンパスてくてくツアー」を行いました。学生会館会議室で行われた総会には、午後一時三〇分より県外からの出席者を含む会員約五〇名が出席し、齊藤委員の司会で総会行事が進められました。

岡光一浩会長あいさつ、続いて、鴻文会名誉会長である高木智見人文学部長のあいさつ、その後、議長に大塚博久顧問を選出し議事に入りました。最初に岡光会長が四年間の鴻文会の事業及び会計報告を行い、渡邊監事の監査報告、会員からの質疑を経た後に、議案について異議なく了承されました。



続いて「役員改選」の議事に移り、田中晋顧問により新役員(案)が提案され、内田光邦新会長以下別掲の新役員が選出され、今後四年間鴻文会を運営する新役員体制が決まりました。総会終了後、午後三時から学生会館大ホール



にて、鴻文会会員で中原中也記念館館長の中原豊氏(昭和五六年文理第二九回卒)を講師に迎え、「生誕一〇〇年・中原中也の可能性」と題して公開講演が開催されました。鴻文会の会員のみならず一般の方も多くお越しになり、中原中也の詩「帰郷」を中心に、その背景にある故郷・山口との関わりや、詩にまつわるエピソードに、詩がもつ様々な可能性と深淵にふれたひとときとなりました。

公開講演会終了後、ご来賓の方や特別会員の先生方とともに記念撮影し、学生食堂ホールに場所を移し、四時三〇分から懇親会が行われました。

渡邊早苗・中村稚恵利両名が懇親会の進行を担当し、岡光前会長のあいさつに続いて、古賀和利副学長に祝辞をいただき、高木名誉会長の乾杯の音頭により出席者一同杯を高く掲げ、祝宴に入りました。

お楽しみ抽選会では、会員ゆかりの品や山口産のお勧め商品が贈られ、マイクを向けられた当選者、贈呈者のコメントが懇親の輪をさらに大きくしていました。

古賀副学長、大塚顧問、岡光会長が肩を組んでの山口大学学生歌の合唱は、出席者全員を懐かしい学生時代へと誘い、大塚顧問の万歳三唱で二時間にわたる懇親会は大盛況のうちに閉会しました。

(人文第三回卒・西洋史学)

総会公開講演

生誕一一〇年・中原中也の可能性

中原中也記念館 館長 中原 豊



中原中也記念館に勤めて一三年が過ぎました。中原という名字のために、多くの善良な文学ファンに中也の血縁ではないかという誤解を与え続けてきています。実際に血縁の方が記念館の館長を務める事例があるのですから、そう思われるのも自然ですが、私は中也と血縁関係はありません。

私がなぜ中原中也の研究をしているかというと、中原姓であることよりも、山口市、山口大学との関わりを抜きにして考えることは出来ません。高校生の時に中也の詩に出会い、文学が好きだったので、中也を研究したいと思い、文学部の国文学、日本文学専攻を目指しました。当時は山口が中也の出身地であるとの意識はありませんでしたが、山口大学を受験することになり、第一時間目の試験が国語、そしてその第一問が中也の「朝の歌」でした。問題を解く前から山口大学に入学することになるのではないかとという予感がありました。

ある学会の懇親会でその話をしましたら、「それは僕が作った問題だ。」と言われました。教育学部の重岡徹先生でした。その問題を解いて山口大学に入学し、水本精一郎先生に教わって中也についての卒論を書きました。そのころは中原中也のお母さんのフクさん、弟の拾郎さんもご存命でしたが、詩はあくまでも、本を通じて、言葉を通じて向き合いたいと思っっていましたので、お会いすることはありませんでした。当時文理学部文学科には大学院がなかったので九州大学大学院に進学しましたが、修了して九州で教鞭をとるようになってからも、ずっと中也を研究していたものですから、記念館に声をかけていただいで今日に至ったわけです。

今年が生誕一一〇年、中原中也は三〇歳で亡くなっていますので没後八〇年でもあります。

そういう年にあたり、沢山のイベントを各地で開催していただいています。講演の依頼もよくいただきますが、ほぼすべての講演のタイトルを「生誕一一〇年・中原中也の可能性」で統一し、しかし内容は変えながら行っています。

ここでいう可能性には、三種類考えられます。一番目は記念館でやっている仕事で、今まで知られていなかった中原中也の作品を発見することです。最近も、夏目漱石の手紙や、正岡子規の俳句が発見されていますが、中原中也にもまだ知られていない作品が残っているかもしれません。最近では手紙を二通発見しました。「中原中也研究」の次号(二二二号)に竹下彦一という詩人にあてた手紙が掲載されます。

二番目の可能性としては、三〇歳で亡くなった中原中也がもし長生きしていたら、どんなふうになり、どんな詩を書いたのだろうかということ。中也の亡くなった昭和十二年は日中戦争が始まった年で、文学には厳しい時代になっていきました。中也はその時代をどう生きたのか、それを考えることを通じて、時代や文学の本質を考えていくことができます。

三つ目の可能性、これが一番テーマになりやすいものです。中原中也の残した詩は八〇年前に書き終えられましたが、今を生きている我々にも影響を与え続けています。詩というものは、決してひとつの正解があるわけではなく、自分がどう向き合うかによっていろいろな解釈が成り立ちます。特に中也の詩は様々なクリエイター、アーティストに影響を与え続けています。文学者だけでなく映画作家、画家、ダンサー、ミュージシャンたちが、中也の詩の影響のもとに新しい作品を生み出しています。そういう意味で、中也の詩はまだいろいろな可能性を持っているといえます。

今日この会場では「帰郷」という詩を取り上げてみます。山口という地が詩の中によく表れていますし、それを通じて中也の持っている可能性を考えてみたいと思います。それでは、資料の中原中也の略歴をご覧ください。



よく知られた中原中也の肖像です。一八歳、大正一四年に東京に出た時に、銀座の有賀写真館で有賀庸五郎というドイツ留学から戻った新進気鋭の写真家に撮ってもらっています。山高帽をかぶり、高級そうなマントを着ています。中也が肖像を撮影した目的ははっきりとはわかりませんが、中也の周辺人物、小林秀雄や青山二郎も同じような写真を撮っていますので、当時の文学者には、こういう写真を撮るのが流行していたのかもしれない。

この写真が中也の生き方をよく表しています。長髪です。この時代、男性の長髪は極めて珍しかったのです。山高帽は紳士のかぶる帽子ですが、それを低くつぶしてかぶっています。そしてマント、全体にアルチュール・ランボーの肖像のスタイルをまねています。日本にこんな男性は非常に少なかったと思います。世間一般の常識に従わず、独自の生き方をしようとしていた中也の心情がこのスタイルからみてとれます。中也は、明治四〇年、今の山口市湯田温泉の

中原医院の長男として生まれました。父親が軍医であったため、すぐに山口を離れ、旅順、柳樹屯、帰国してからも広島、金沢と移り住み、小学校に入学するころに山口に帰ってきました。生家は中原医院という個人病院でした。診療室、その奥に大きな母屋、周辺に入院施設もある、地方の大きな個人病院で、六人兄弟の長男としてその後を継ぐことが期待されていました。当時の家族写真をみますと、すでに弟の亜郎が小児結核で亡くなっていますので、兄弟としては五人の子どもが写っています。義理の祖父、養子・養女として中原家に入った父親と母親、実の祖母、看護師さんたち、通いの医師、お抱えの人力車の車夫、こうした大家族の中で育てられました。

中也は、小学校の時、たいへん優秀な子どもだったといわれています。習字がその優秀さを示しています。小学校三年生にはみえないりっぱな字を書いていますし、甲の上の成績ももっています。小学校六年生頃の写真では袴をはいて写っています。当時袴をはく子どもは珍しかったと思います。裕福な家庭の中で大切に育てられたことが窺えます。

四年生までは今の湯田幼稚園の位置にあった下宇野令尋常高等小学校、現在の湯田小学校に通い、五年生からは、山口師範学校附属小学校、今の教育学部附属小学校に通っています。そして、現在の山口高等学校の前身となる県立山口中学校に大変優秀な成績で入学しています。中也は、中学二年の時に中原家の墓の墓石の文字を書きます。連筆であったこと、そして、中原家を背負ってたつ人間として、期待されていたことを物語っています。

この中学校時代に、短歌に凝って落第してしまします。山口中学校時代の中原中也の写真をみますと、生意気そうな不敵な顔をしています。自分は芸術家になると決心し、無理解な大人たちに激しく反発していたのです。三年次に落第して京都の立命館中学に移ります。その後のことは資料でみていただくことにしますが、京都から東京へと転じて詩人となることを志します。

定職は持ちませんでした。収入があったとすれば、わずかな原稿料とフランス語の家庭教師の謝礼程度で、生計は中原家からの仕送りに頼って、ひたすら詩を書く生活をしてきたわけです。それでは、中也の残した詩、井上公園の詩碑にも刻まれ、中也の代表作のひとつとなっている「帰郷」について話を進めていきます。

資料には「帰郷」というタイトルで二つの詩を紹介しています。専門的に、異文、バリエーションといいますが、違ったかたちの「帰郷」が残されているわけです。右側が、皆さんによく知られている「帰郷」です。

帰郷

柱も庭も乾いてゐる
今日は好い天気だ

縁の下では蜘蛛の巣が
心細さうに揺れてゐる

山では枯木も息を吐く
あゝ今日は好い天気だ

路傍の草影が
あどけない愁みをする

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる

心置なく泣かれよと
年増婦の低い声もする

あゝ おまへはなにをして来たのだと……
吹き来る風が私に云ふ

詩集『山羊の歌』所収
(一九三四年一月 文圃堂書店)

井上公園の詩碑には後半の四行、

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる
あゝ おまへはなにをして来たのだと……
吹き来る風が私に云ふ

が刻まれています。
これは、詩集『山羊の歌』からとっています。これが専門用語でいう最終稿、定稿になります。そして、もうひとつの「帰郷」があります。違うところだけ注目してください。最後の連の前半にこんな二行がありました。

庁舎がなんだか素々として見える、
それから何もかもがゆっくりと私に見入る。



この「帰郷」は、昭和八年季刊「四季」第二号に載ったものです。「山羊の歌」は翌年に出ていますから、これが最終稿と思いたくありませんが、実は、「山羊の歌」は昭和七年には編集が終わっていて、出版元が見つからなかったために昭和九年によく出版に至りました。昭和七年の時点で確定していたのですが、昭和八年に二行多い「帰郷」をわざわざ発表しています。なぜこの二行がなくなってしまったか、その事情を証言しているのが、内海誓一郎の「追想」という文章です。

この「帰郷」が世に出たのは昭和五年のことです。スルヤという音楽団体の発表演奏会で歌曲として歌われ、雑誌に歌詞として掲載されたのが世に出た初めとなります。

スルヤはアマチュアの音楽家、作曲家の集まりで、当時から西洋音楽の殿堂であった東京音楽学校、今の東京芸術大学とはちがう音楽をつくろうとして、東大の文学部に在籍していた諸井三郎、理学部に在籍していた内海誓一郎が作曲した楽曲を発表演奏会で世に送り出していました。内海は半ば独学で作曲を学んで活動していました。スルヤの集まりで中也に出会っていろいろな詩を見せられ、「帰郷」を選んで作曲し、それが演奏されたのが昭和五年です。「追想」の中で、次のように証言しています。

兎に角「帰郷」を作曲したのであるが、此処で又私は我儘を云った。それは、あの詩の、「ああお前は何を来たのだと……」と云う一句の前に尚二行程の句があったのだが、之はどうも嫌だから省きたいと云ったのであるが、中也は此の我儘を許して呉れたのみならず、後日自分の詩集に載せる時にも之を除いてしまった。

曲が出来て彼に聞かせた時に、最初にチェロが前奏する四小節を聞いて、彼は吃驚して私に「之は自分の故郷の姿だ」と叫んだ。私は実は彼の故郷山口の方は、一向未知の地方であったのだが、昨年此地方を訪れる機会があって、忘れて居たこの旋律を突然に思い出し、矢張り彼を通じて現れた彼の郷土と云ふものに衝き当る何物かを、此のモチーフが含んで居たのかも知れないと思つた。

内海誓一郎「追想」
(「四季」一九三七年一月)

作曲をする時にどうしても音楽に合わなかったで、省いていいかと中也に打診し、彼が了解したので二行省いて歌曲として完成させたわけです。

スルヤは音楽発表会を開くとともに「スルヤ」と題した機関誌を発行しました。そこに歌詞としての「帰郷」が載っています。点線が二行ほど書かれています。もともとあった二行を省略したという意味合いで点線を書いたのだと思います。どんな歌曲であったのか。みなさんも関心をお持ちだと思いますし、私もぜひ聞いて

ていただきたいので、CDを準備しました。お聞きください。

(内海誓一郎作曲「帰郷」演奏)

一九九七年、中也生誕九〇年の年に山口県教育会館で公演した際のライブ録音です。歌っていらつしやつたのが山口大学教育学部の末廣正巳先生です。ここでも山口大学にご縁がありますね。

チェロの旋律で始まり同じくチェロの旋律で終わっています。そこをきいて自分の故郷の姿だと感じたと言っています。ゆつたりとしたチェロの旋律で思い起こさせる田園風景が歌曲「帰郷」の素地になっていると思います。

では省かれてしまった二行はどうだったのでしょうか。内海誓一郎がプロの作曲家であれば、二行を活かした作曲ができたのでしょうか。改めて省かれた二行をみてみたいと思います。

庁舎がなんだか素々として見える、
それから何もかもがゆっくりと私に見入る。

山口市内で庁舎にあたる建物といえば、まがいなく山口県庁の庁舎です。画像をご覧ください。向かって左側が旧庁舎、右側が県政資料館として残されている議会議棟、このふたつの建物が今と同じ場所に建っていたわけです。右奥のほうに議会議棟がみえています。モノクロの写真ですから、このあたりの並んでいる木は、白っぽく見えるので桜かもしれません。後ろの濃い色、これは間違いなく緑です。当時の県庁あたりはこれだけ緑が豊富でした。その中にあの白い建物が建っていたのです。こうして見ると、この詩にびつたりきます。

一行目の〈素々〉にある種の嫌悪感が表現されています。中也は、現在の山口市役所の駐車場付近にあった附属小学校、現在の県立図書館の位置にあった県立山口中学校に通っていました。中也は毎日のようにこうした風景を見ていて、この建物に反感を覚えていたのではないかと思います。中也は当時芸術家になろうとして

いて、まわりの人から反対されています。〔芸術を遊びごだと思ってるその心こそあはれなりけれ〕という短歌を残していますが、周りの大人たちが芸術を余技と考えている中、中也是一生の仕事と生きていました。県庁という存在は、中也にとって世俗の価値観、権威の象徴のようにみえたのではないのでしょうか。だから「しらじら」として見えたのです。



二其 豊全 農園 (浪江口山)

二行目、視点の位置が変わり、詩人が見られる側に回ります。白地の県庁以外の緑に包まれた田園、農業を営む人たちから見られています。しらじらとした存在として見られています。皆さんによくご紹介するエピソードがあります。中原中也記念館が建てられる時に、「どうしてあんな放蕩息子のために市の税金を使うんだ。」という反発がおこったという話です。中也といえば、放蕩息子の代名詞、湯田の方は、お母さんから、「中也のようになっちゃあいいん」と叱られていました。当時も同じように見られていたのでしょうか。その後登場する〈吹き来る風〉が、中也に「東京まで行って何をやってるのか」「へんな恰好して、本当に学校に行っているのか」と言っ

ていると解釈すれば、とてもわかりやすい詩になります。

しかし、内海誓一郎は、この言葉に曲をつけなかったのです。そして、中也も最終的にそれを了解しました。

もうひとつ、資料を用意しました。フランスの詩人ポール・ヴェルレーヌの『叡智』という詩集です。一篇一篇の詩にはタイトルはありません。第三章の六番目の詩、全体の代表作とされているこの詩に影響をうけて中也は「帰郷」を書いていきます。中也の友人だった河上徹太郎の訳で紹介してみます。

空は屋根の彼方で
あんなに青く、あんなに静かに、
樹は屋根の彼方で
枝を揺がす。

鐘はあすこの空で、
やさしく鳴る。
鳥はあすこの樹で、
悲しく歌う。

ああ神様、これが人生です。
卑ましく静かです。
この平和な物音は
街から来ます。

———どうしたのだ？お前は又
涙ばかり流して？
さあ、一体どうしたのだ、
お前の青春は？

河上徹太郎訳『叡智』
(一九五九年一月新潮文庫) 所収

ヴェルレーヌは、アルチュール・ランボールの才能を認めてシャルルヴィルからパリに呼び寄せますが、やがて同性愛の関係になって二人で旅をします。しかし、仲たがいでランボロに銃口を向けてしまい、逮捕、投獄されます。その時にカトリックの信仰に目覚めて宗教的な詩

を書くのですが、それを出版後に出版したものが『叡智』という詩集です。獄中で生まれた詩ですから、屋根の彼方、空、木など牢獄の窓から見た風景が描かれています。そこにヴェルレーヌの贖罪の気持ちが投影されています。視線は神を求めて高みへと向かっているわけですが、中也は、ランボロばかりでなく、こうしたヴェルレーヌの詩にも深い影響を受けています。

これを踏まえて中也の詩を読みますと、影響を受けながらも、違った要素を盛り込んでいるのがわかります。前半の三連はかたちとしてひとつの特徴をもっていて、後半の二行が四字さげられています。連の前半と後半で高低のあざやかなコントラストが描かれています。

前半は、視線は遠くに向かっています。そして、故郷を誇らしげに思う心情が出ています。後半の二行をまとめて読んでみますと、今度はあきらかに視線が下のほうに向いています。暗い、悲しい、何かを抱え込んでいる心情が表されています。こうして鮮やかなコントラストを描いてみせているわけです。ひたすら、神とだけ向き合っているヴェルレーヌに対して、中也は高みだけを描いているわけではありません。

削除されたあの二行を続けて読んでみますと、周囲の視線が強い印象を与えます。いつてみれば、〈おまへはなにをして来たのだ〉が放蕩息子を批判するだけの意味になってしまいます。この二行がなくなると、高いところに向かっている視線と後半の低く暗いところに向かっている視線それぞれ感情の流れが、それぞれに〈おまへはなにをして来たのだ〉に流れ込んでいきます。より深みを持った響きをもってきます。

中也は詩集に元通りの「帰郷」を入れることも出来たはずですが、そうはせずに、内海が作曲したかたちになりました。なぜでしょうか。内海は作曲にあたって当然自分なりにこの詩を解釈したはずですが、この二行を省いて作曲したいという要望は、作曲上の必要もあったかもしれないですが、この二行がない方がよいという、中也の詩に対する批評になっていたのだと思

います。

中也はそれを受け入れたわけですが、それが最終的にこのかたちで詩集に収められた理由です。最初にお話しした可能性ということに戻りましょう。中也が音楽家の作曲を通じた批評を受け入れて自分で自分の世界を変えたように、別のジャンルの芸術と接することで詩の世界は変わりうるわけです。今、中也はこの世にいませんから、詩そのものに手を加えることはできません。しかし、そこに新しい解釈を加えることはできます。それが、新しい音楽、新しい映画、新しい舞台を生み出す原動力となるのです。

中也の詩の持つ可能性はそこにあります。今を生きる自分にとって中也の言葉がどんなふうに響くか、そこに一番大切なものがあると思いますし、そうやって世代を超えて多様な読み方をされるところに、中也の詩人としての名譽もあると思います。今年は一〇〇年ですが、一五〇年たっても、二〇〇年たっても、ずっとこのように読まれてほしいと思っ

ています。

詩碑に刻まれる際にさらに二行削られたという問題もありますが、こちらは時間の関係で省略しました。大岡昇平の文章をご覧ください。これには賛否両論あり、〈年増婦〉があった方がいい、といわれる方もいらっしゃいます。

誤解のないように言っておきますが、ここでいう「年増」という言葉には年齢の高い女性への蔑視は含まれていません。この時代の「年増」は大人の女性というほどの意味です。女性のお客様も多いのでそこだけはお伝えしておきます。

生誕一〇〇年ということで、これからも沢山の行事が企画されています。近いところでは九月一〇日に、市内で「合唱オペラ 中也！」が上演されます。上京してからの中也の半生を合唱オペラという形で描いています。足を運んでいただけましたら幸いです。

(文理第二九回卒・国語学・国文学)
当日の講演を鴻文会事務局において文字化したものです。

◎平成28年度事業報告

1. 正副会長会議（5/14）（9/3）
2. 第46回役員会（5/14）
3. 第22回（5/27）・第23回（3/3）山口大学同窓会理事会
4. 留学生奨学金授与式（7/8）
5. 会報「鴻文」編集会議（9/3）（11/5）
6. 第4回山口大学ホームカミングデーおよび
人文学部教員・在学生・卒業生交流会（10/29）
7. 会報「鴻文」第36号発行（12/15）および配布
8. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式（3/21）
9. その他

◎平成29年度事業計画

1. 正副会長会議（5/13）（7/8）
2. 第47・48回役員会（5/13）（7/8）
3. 山口大学同窓会理事会（5/29）
4. 総会実行委員会（8/12）
5. 第10回総会・懇親会（8/26）
6. 第5回山口大学ホームカミングデー（10/28）
7. 会報「鴻文」編集会議（11/15）
8. 会報「鴻文」第37号発行（12月予定）
9. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式（3/20）
10. その他

◎平成28年度決算

収入総額	5,582,430円
支出総額	2,362,831円
残高（次年度繰越金）	3,219,599円

◎平成29年度予算

〈収入の部〉

科 目	28年度予算額	決 算 額
繰越金	1,458,428	1,485,428
会費収入	1,800,000	1,660,000
繰入金	1,000,000	2,000,000
賛助金	300,000	432,680
雑収入	1,572	31,322
合 計	4,560,000	5,582,430

〈収入の部〉

科 目	29年度予算額	摘 要
繰越金	3,219,599	
会費収入	1,800,000	10,000×180人
繰入金	0	
賛助金	300,000	
雑収入	401	利子等
合 計	5,320,000	

〈支出の部〉

科 目	28年度予算額	決 算 額
会議費	100,000	48,900
役員等行動費	100,000	20,900
事務所運営費	900,000	922,675
事務費・通信費	150,000	171,655
会報費	720,000	694,500
ホームページ維持費	50,000	25,704
分担金	151,000	150,864
寄付金	100,000	100,000
奨学金	151,000	151,872
助成金	100,000	34,864
慶弔費	50,000	10,917
予備費	1,988,000	29,980
合 計	4,560,000	2,362,831

〈支出の部〉

科 目	29年度予算額	摘 要
会議費	100,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費	100,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費	900,000	家賃、人件費、事務所経費（電話・電気、その他）
事務費・通信費	300,000	封筒・振込票等印刷、郵送、消耗品、雑費
会報費	720,000	印刷7,000部、発送5,800通、発送アルバイト代
ホームページ維持費	50,000	プロバイダー契約料、メールウイルスチェック料、その他
分担金	151,000	山口大学同窓会（手数料含む）
寄付金	100,000	山口大学教育財団「日中学术交流基金」
奨学金	151,000	留学生への支給（手数料含む）
助成金	100,000	「同窓会等」開催助成（手数料を含む）
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、香典、弔電、その他
総会費	900,000	講演謝金、懇親会補助、広告料 案内・チラシ印刷・発送・発送アルバイト代等
予備費	1,698,000	
合 計	5,320,000	

〈特別会計〉

科 目	28年度財産	27年度財産
中国電力債	1,465,537	1,465,537
定額預金	650,000	2,650,000
合 計	2,115,537	4,115,537

平成29年5月2日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 村田 博
渡邊 早苗

〈特別会計〉

科 目	29年度財産	摘 要
中国電力債	1,465,537	東洋証券
定額預金	650,000	
合 計	2,115,537	

鴻文会役員

平成二九年八月〜平成三三年八月

名誉会長

高木 智見(人文学部長)

会長

内田 光邦(昭四二年卒・英米文学)

副会長

森重 祐二(昭五五年卒・社会学)
渡邊 早苗(昭五九年卒・西洋史学)

顧問

和田 敏英(昭二八年卒・英米文学)
大塚 博久(昭三一年卒・中国哲学)
大野 光生(昭三一年卒・中国哲学)
田中 晋(昭四一年卒・英米文学)
岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)
添田建治郎(昭四四年卒・国文学)

委員

兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)
原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)
山本 明史(昭六三年卒・国史学)
山本 達夫(昭六〇年卒・西洋史学)
齊藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)
林田 徳夫(昭五七年卒・社会学)
和崎 睦子(平六年卒・社会心理学)
大谷 泰子(平一三年卒・社会情報論)
正分あゆみ(平一六年卒・博物文化論)
青島 啓(平一〇年卒・博物文化論)
鈴木千登世(昭五九年卒・国文学)
橋本 達彦(平五年卒・国文学)

藤井 浩子(平二五年卒・中国語学)

池田 容子(平九年卒・英米語文化論)

江浪 香織(平二七年卒・中国語学)

浅野 靖(昭五七年卒・フランス語学)

中村稚恵利(平一三年卒・言語情報論)

監事

山田 典子(昭六一年卒・社会学)

片山 恵子(平元年卒・英米文学)

学内委員

根ヶ山 徹(昭六〇年卒・中国語学)

村田 裕一(平三年卒・考古学)



山口ちょうちん祭

大学関連ニュース

(鴻文会が関わったもの)

山口大学同窓会理事会等の報告

・第二三回山口大学同窓会理事会
平成二九年三月三日(金) 一五時〜一六時
事務局一号館特別大会議室
理事・岡光会長、内田副会長出席

平成二八年度事業報告(暫定)について
新入生歓迎フェスティバルへの
協賛について

山口大学基金について
山口大学の動向について
その他

・第一回山口大学同窓会理事会と各学部との意見交換
平成二九年三月三日(金) 一六時一五分〜一七時一五分
事務局一号館特別大会議室
理事・岡光会長、内田副会長出席
各同窓会と大学、学部との連携について
人文学部関係

・同窓会に対する認識が本学部では低い。
・関係が緊密でないのは、学部の特性があるのではないか。

・山口大学卒業式
平成二九年三月二日(火)
山口県スポーツ文化センター
岡光会長出席

・第二四回山口大学同窓会理事会
平成二九年五月二九日(月) 一六時〜一七時三〇分
事務局二号館二階特別小会議室
理事・内田副会長出席

平成二八年度事業報告及び決算報告について
平成二八年度会計監査報告について
平成二九年度山口大学同窓会事業計画及び予算について

山口大学の動向について
山口大学基金募金状況及び二九年度学生支援事業について

その他
クラウドファンディングについて
・第五回山口大学ホームカミングデー
平成二九年一〇月二八日(土)
一〇時〜一六時

人文学部・二〇分野の研究室を開放し、自由交流



総会懇親会

総会当日 キャンパスをてくてくツアー

鴻文会会則

(昭和五六年一月三十一日制定)

(総 則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市平井七三―二沖田ビル二〇二におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 会報及び会員名簿の発行
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項

(会 員)

第四条

1. 正会員 山口大学文理学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者
2. 准会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学部研究科院生
3. 特別会員 山口大学文理学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官

(会 費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。准会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

(役 員)

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

1. 会長 一名
2. 副会長 二名
3. 委員 若干名
4. 監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。

3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。
- 第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部長経験者(本会正会員)ならびに会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。

(総 会)

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

1. 事業の報告
2. 会計報告
3. 役員を選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項

(支 部)

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則

この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月二三日より改正施行する。

この会則は平成二五年八月一七日より改正施行する。



山口市後河原 春の風景 一の坂川沿いは桜満開

学生数

(平成二九年一〇月現在)

人文学部

	人文学科	人文社会学科	言語文化学科	合 計
1年	199			199
2年	184			184
3年		101	99	200
4年		110	110	220
合計	383	211	209	803

大学院人文学部研究科

	人文科学専攻
1年	5
2年	2
合計	7

平成二八年度

学部卒業生・大学院修了生の進路状況

	学部卒業	大学院修了
宿泊業・飲食サービス業	4	
教育・学生支援業	23	1
医療・福祉	5	
複合サービス事業	2	
サービス業	11	
公務	23	
上記以外の就職先	0	
進 学	4	1
合 計	163	2

	学部卒業	大学院修了
建設業	5	
製造業	12	
情報通信業	16	
運輸業・郵便業	6	
卸売業・小売業	29	
金融業・保険業	17	
不動産業・物品賃貸業	3	
学術研究・専門技術サービス業	3	

資料提供 人文学部

新任教員挨拶

奥州から長州へ



山口 睦

平成二九年四月一日より山口大学人文学部に着任いたしました山口睦と申します。社会学コース、民俗学・文化人類学分野に所属しております。

着任してから半年が経ちましたが、「山口大学の山口です」と自己紹介するたびに場が和む日々を送っています。不思議なご縁です。私は生まれが福島県郡山市で、その後、宮城県仙台市、山形県山形市と主に東北地方で育ったため、山口県には一度も来たことがありませんでした。年末に初めて山口県に来たとき、新山口駅からレンタカーを借りて、榎野川沿いを大学に向かいました。なだらかな川の流れ、ぐるりと連なる低い山々は、幼少期を過ごした山形市とよく似ており、心が安らいだのを覚えていま

す。昔の話になりますが、会津藩を中心とした奥羽列藩同盟は、薩長閥政権に負けました。そのため、前任地の仙台では出発前に「これから長州に行きます」と言って笑っていました。ちょうど平成三〇年は維新一五〇年ですが、気分がこちらの気持ちとは裏腹にみなさんに優しくしていただいています。

私の専門は文化人類学、主たるテーマは日本社会の贈与交換です。調査地域が日本であるため、日本民俗学にも片足を突っ込み、出会った資料が一九世紀からの贈答記録(香典帳、祝儀帳など)であったため近現代史にも手を出し鬼子のような立場で研究してきました。奇しくも所属が民俗学・文化人類学分野ということ、このハイブリッドな研究生生活が役にたつと喜んでおります。

近年は、災害研究を行っています。二〇一一年三月に起こった東日本大震災の被災地が自分の故郷であり、原発事故で苦しむ福島県が生地で、修士課程以来の調査地が宮城県内で放射線被害に苦しむ県南であったことなどから、それまでテーマとしてこなかった災害研究に携わることになりました。この動機は、特殊なものではなく、多様な分野の研究者が自身が被災した、被災地との何らかの関係性がある、とにかく何か手助けになることをとといった動機で参加し、災害研究が日本全体で活発化したことは皆様もご存知の通りであります。

欧米などに比べて寄付文化がない、といわれていた日本社会ですが、東日本大震災を契機として寄付やボランティア活動が活発化しました。具体的な事例として、女性たちを中心とした手仕事ビジネスに注目しています。女性たちの裁縫や編み物の技術を生かして、ぬいぐるみやアクリル毛糸たわしなど多くの手作り商品が生まれました。なぜ、こんなに多くの手作り商品が生まれたのか、どのようにしてビジネスとして成立し運営されているのか、といったことを調査しています。東松島市のソックモンキー「おのくん」や手編みセーターの「気仙沼ニッティング」など会社化するなどして長く活動が続くものもあれば、震災後五年を経て活動を停止するものもあります。これらの活動は、外部者との関わりによって生まれ、商品アイデア、材料調達、IT技術、流通支援などに常に外部からの支援が注入されることによって活動が継続しています。携わる女性たちを家計を支える生計者にはしませんが、家事・育児と両立してささやかな収入をもたらす役割を果たしています。西日本にも、避難者や支援団体があり、今後はこちらでの調査も行っていきたいと考えています。

これまでの自身の研究経験が少しでも学生指導に生かせるよう、また、微力ではございますが大学運営に寄与できるよう全力を尽くしていきたいと思っております。皆様のご指導・鞭撻よろしくお願い申し上げます。

(社会学講座 准教授)

着任のご挨拶に代えてー 研究テーマの紹介



桑畑 洋一郎

平成二九年一〇月一日付で人文学部に着任いたしました、桑畑洋一郎と申します。専門は社会学(医療社会学・社会病理学)で、社会学コースの社会心理学分野に所属しております。なかなかきちんと挨拶申し上げる機会がないのですが、学部の教職員の皆様方と鴻文会の皆様方にこの場をお借りして、改めてのご挨拶と、普段お世話になっていることの御礼を申し上げます。

研究している主たるテーマ(というか対象)は、ハンセン病とHTLV1関連疾患の当事者です。他にも、前任校(下関の梅光学院大学です)で保育者養成に関わっていたこともあり、子育て支援や社会的養護についても、やや実践的な研究を行っています。

主たるテーマの方を順に説明することで自己紹介に代えさせていただきます。ハンセン病当事者の研究というのは、簡単に言えば、「ひどい状況下で、当事者はどう生き抜いてきたのか」といったことの研究です。日本では、ハンセン病を患った人に対して「終生絶対隔離」が行われており、ハンセン病患者は否応なく療養所に隔離され、療養所内では非常に過酷な処遇がなされていたというところは多くの方がご存知だと思います。私の研究は、そうした過酷な状況があったことは前提として、「ではその中で当事者はどう生きてきたのか」ということを探るものです。ハンセン病当事者に限らず多くの人間に共通することだとは思いますが、人間は置かれた状況や定められた枠を唯々諾々と受容するだけではなく、状況や枠の中で何とか何とかどうにかしながら自分の生をより豊かに

しようと営為するものです。療養所内外でインタビュー調査をするときよく分かりますが、ハンセン病当事者も実際にそういう営為の歴史を重ねてきています。しかしながら、そのことが実態の記述のレベルでも社会的な考察のレベルでもほとんど表に出てきていないことに違和感を持ち(というより「興味深いことなのだからこれを考察するべきだろう」と思い)、そのことを研究してきました。

もう一つの研究テーマであるHTLV1関連疾患というのは、これもご存知の方は多いと思いますが、母乳感染することがある白血病ウイルスのことです(したがってキャリアが育児をする際は母乳を与えない方が安全とされます)。推計値ですが、日本全国に百万人ほどのキャリアがいるとされます。この病の当事者もいくつかの困難を抱えており、たとえばそれは、「母乳育児規範が強い日本では非母乳育児をするキャリアが不当に責められる」といったことや、「病気の認知度が低いため、周囲から無理解にさらされる」といったことや、「医療従事者すらこの病気のことをよく知らない」といったことが挙げられます。こうした、病に起因する困難と、その困難の中での当事者の営為を探ってきました。

以上のように、主たる研究テーマとしては、「何かしらの病を病んだ人々が、病んだことでどういう状況に置かれ、その状況下で生きることでそれをどうやって変えようとしているのか」というものであるかと思えます。ハンセン病に関しては、(評価が分かれるのですが)日本の代表的なハンセン病医である光田健輔が防府出身ですし、HTLV1関連疾患当事者の方は山口にもいらつしやいます。また、実践的に行っている研究の方も、基本的な研究フィールドは下関です。それほど強く意図していたわけではないのですが、山口とも地域的に関連があるテーマばかりですので、これまでに行ってきたことを継続しつつ、さらに研究を深めていきたいと考えております。山口大学に着任してまだ一ヶ月程度ですが、先生方と、分野を問わず研究についての議論を定

平成二九年度 山口大学人文学部 生涯学習事業

平成二九年度人文学部生涯学習推進室が催した事業について報告します。

現時点で人文学部生涯学習推進室は山口大学地域未来創生センターと協力して学外講座を二つ組んでいます。一つは山口市で開く「やまぐちサタデー・カレッジ」で、すでに二〇年以上前から続いています。二つ目は、防府市教育委員会のお世話で開く「公開講演会」で、今年で六年目になりました。

「やまぐちサタデー・カレッジ」は春と秋の二回、土曜日に催す講座です。今年も、各四コマを、山口大学吉田キャンパス内にある大原就職支援施設で実施しました。

春の「サタデー・カレッジ」は、歴史学コースの南雲泰輔先生が担当しました。演題は「後期ローマ帝国時代のコンスタンティノール市とウァレンス水道橋」です。紀元後四世紀は、ローマ帝国の重心が西方から東方へと変化した世界史上の一大転換期であり、それを象徴する出来事のひとつがコンスタンティノール市の創建でした。この新しい「首都」では、やがて人口増に伴ってインフラ整備が課題となりましたが、特に重要であったのは水道です。

講座では、後期ローマ帝国時代のコンスタンティノール市の歴史について、四世紀後半に建設され、今もイスタンブール市内に屹立するウァレンス水道橋に焦点を当てて紹介されました。南雲先生は美しい視覚資料をふんだんに使って、この物語を四コマに分けて、「後期ローマ帝国の歴史とコンスタンティノール市」、「コンスタンティノール市の水供給の歴史」、「ウァレンス水道橋の建設」、「ウァレンス水道橋の昔と今」を六月二四日と

七月一日に二コマずつ講義しました。

秋の「サタデー・カレッジ」は一〇月七日から四週間に渡って、欧米言語文学コースのドボアシュ・ミシェル先生が「フランスの無声映画」について解説しました。

講座の目的は、フランスの代表的な無声映画(明治後半〜昭和初期)を見ることによって、フランス文化についての知識を深めることと、「ジョルジュ・メリエス」、「連続ドラマ」、「時代劇」、「シニールレアリスム」を四コマの授業でフランスの初期映画史を見渡しました。毎回、短編映画を上映しながらドボアシュ先生が弁士役をして、その映画の説明や作者の珍談も交えて、授業を進めました。

人文学部は山口大学地域未来創生センターと協力して「やまぐちサタデー・カレッジ」を毎年開講しています。去年までは地域未来創生センターの職員数名が「サタデー・カレッジ」の当日に、教室準備、案内、受付、出席確認、受講生アンケート、記録写真撮影等を行いました。今年からは、原則として講師が一人で全て担当することになりました。そのため、いろいろなことが行き届かず受講生を不自由な目に遭わせました。しかし、秋の「サタデー・カレッジ」の初日には、地域未来創生センターの職員の方が休日返上して運営のお手伝いをしてくださいました。感謝申し上げます。

さらに、地域未来創生センターの規則で、今まで事前準備等のために雇用していた学生アシスタントは今年から受講生が三〇人以上の講座に限られることになり、事業運営の状況が厳しくなりました。



映画弁士



ドボアシュ先生の映画解説



会場の前のドボアシュ先生



旧山口藩庁門

今年の防府市での「公開講演会」は九月に行いました。土曜日の午後に二回、防府市文化福祉会館で歴史学コースの池田勇太先生が「明治維新とはどのような変革だったのか」というテーマについて論じました。来年が明治維新一五〇周年であるため、時宜を得た題目でした。

明治維新というと、幕末の志士たちが活躍した物語を思い浮かべる方が多いと思いますが、近世から近代への転換のなかで明治維新を考えると、それはいったいどのような変革だったかということがこの講座の中心でした。

九月二日は「領主制の廃棄」、九日は「自由」と文明開化」という二つのテーマに分けて、具体的にどのような過程を経て政治や社会の変革が進んでいったのかを、歴史資料を基に池田先生が解説しました。

(人文学部生涯学習推進室長
Phillips John David 准教授)

同窓賛歌

恩師「渡辺眞治先生の思い出」



木下 正俊

渡辺先生と私の出会いは、六四年前の昭和二九年(一九五四)、先生は三〇代で一般教育科目「西洋史概説」でした。高校とは異なる先生の歴史への探求と講義の素晴らしさに驚き、たちまち先生の虜となってしまいました。そして西洋史学科を専攻し、先生の指導を受けることになりました。

当時の西洋史学科は、「フランス中世史」の権威である益田健次教授と渡辺眞治助教授の二人で、一年後益田先生がアメリカへ留学された後、渡辺先生が私達学生の勉強や生活、卒論、就職の世話など孤軍奮闘されました。

先生の専門は、先生からは「史学史」と「アメリカ史、特に外交史」と聞きました。「アメリカ史」は、「フランス語」と「イタリアとフランス中世の文化史」を、渡辺先生からは、「アメリカ史と西欧関係史」、「アメリカ外交史」などを教わりました。教室の中での渡辺先生の授業は、真摯で厳しくノートをとるのは大変でしたが、講義の奥深さには目を見張るものがありました。

「史料講読」は「ギリシア史」の輪読でした。我々学生が交代で翻訳し歴史的背景などを説明するもので、分量は多い上にスピードが速く、ピクピクものでした。先生が常日頃言っておられた「語学に強くなりなさい。」とはこれだったのかと強く感じたものです。

しかし、講義の後には柔和な顔で、アメリカの学生生活の様子や歴史の中のこぼれ話、また、「Oh My Darling Clementine (ゴールドラッシュの金鉱掘りの歌)」や「S. Foster of Beautiful Dreamer (夢見る人)」などの歌を

原語で教わりました。

なお、当時は他の学科の先生もハイレベルな水準で専門に情熱をもつて我々に語りかけられ、講義の後には自分の学生時代や、戦前のドイツに留学された思い出など話題は尽きませんでした。

また、研究室間の交流や室内外のコンパなども多く、皆で語り合ったことや年二回の研究室対抗ソフトボール大会には先生と一緒に頑張ったこと、よい思い出です。

コンパの時には先生と肩を組んで歌い、先生をお送りした後数人でS君の下宿に押しかけ、一組の布団に皆で雑魚寝をしたこともありました。

時には先生のお宅(官舎)にお邪魔しました。部屋には電気蓄音機と交響曲やオペラ、ジャズなどのレコードがあり、よく聞きました。私が後年結婚式などに出席した時、「オーソレミオ」を歌うのはここが原点です。



私の卒論はアメリカの鉱山開拓を中心とした「西部開拓史」で、参考書の一つとして渡辺先生が「Turnerの『American History』を丸善から取り寄せてくださり、それ等を基に書きまし



た。これはアメリカの「Frontier Spirit (開拓者精神)」を称えたものでしたが、渡辺先生からは、今後は白人だけではなく、先住民(インディアン)、黒人などの多面的観点からの研究が必要だとの指摘を受けました。後年、先生は「アメリカ黒人史」を研究されたと聞いています。

卒業後、私は故郷の市役所に就職、歴史からは遠のきましたが、先生とはほぼ毎年一回「渡辺先生と語る会(仮称)」でお会いし、先生が退官される迄続きました。先生はその後教授、文学博士、人文学部長に就任されましたが、この活躍のことは後輩の皆様にお任せしたいと思います。

後年、私は種々の「企画」を考える場合、先生から教わった「多面的視点からの検討」は、史学の論理感から学んだものであり、歴史を学んでよかったと思っています。

リタイア後、私は時々山口に行き六〇数年前の自分を演出、幻の先生や研究生にも会うのです。ああ、すばらしき山口と山大、わが青春に！

(文理第六回卒・西洋史学)



右は昭和50年代後半西洋史研究室のコンパ風景。「後河原世代」ではありませんが、惣野旅館でのコンパが恒例でした。木下さん提供の写真とほぼ同じアングル。右端に写っている柱は同じものではないでしょうか。

左は現在の一の坂川付近。惣野旅館の看板はそのままにされています。

西洋史研究室の思い出



井町 頼信

私が文理学部文学科に入学したのは五三年前のことです。一年生の時、二年生になったらどのコースへ進むかという、先輩方によるオリエンテーションがありました。その時、西洋史からは藤岡先輩が指導の言葉を述べられ、西洋史研究室には「ティータイムがある」と言われた

のが、私と西洋史研究室との出会いでした。そして私は二年生になり念願の西洋史へ進むことができました。

益田、渡辺両先生から、原書で指導を受け、大学の雰囲気浸ることができ、語学の興味くらは味うことができました。ただビスマルクの東方問題で、「東方問題はボンメルンの一擲弾兵の骨にも値しない」という文が、どういう意味か分からず、自分の和訳自体がまちがっているのかなあと迷ったことがありました。

益田先生のお宅には学生みんなでおしかけて、先生は奥様ともども、昔の時代のお話をして下さいました。私はサークルがY M C Aだったので、先生の講義は特に関心を持って受けることができました。先生は当時としてはハイカラな車に乗っておられ、そのお車姿が湯のみに描かれていました。同じ西洋史の同級生の二家本君が霧島で遭難死し、そのお墓に参った時、その湯のみが墓前に置いてあったのが、悲痛な思い出となりました。

渡辺先生は厳しい印象がありましたが、一緒にタバコを吸いながら学んだという大人扱いされた自覚も印象深いものです。私はあまり真面目でなかったのですが、先生から、「実社会ならともかく、学校社会では君にはいい成績はやらない」と言われました。確かに私は余興や囲碁で先生から評価されていました。いつかコンパで、戦争中の勤労学徒の歌を歌い、先生から「よく知ってるなあ」と言われました。

西洋史の仲間、みんな親密で、同級生六人で九州北部の熊本・長崎を研修旅行しました。また、当時中国で文化大革命の嵐が吹き荒れていた時だったので、文化大革命の研修をするために岩城山に泊まり込みました。

個人的なこととしては、先輩の沖田さんと同級生の寺田さんが結婚されました。また、私は前述の先輩である藤岡さんと、卒業してから二人とも高校の教員になったため、夏休みを利用してテントを担ぎ、日本中の島を研修して歩きました。隠岐、対馬、五島、佐渡、姫島、見

島、全部テントの中で勉強したものです。痛恨の極みは、これも前述の二家本君が霧島

で同じ文学科の同級生である、大友君・村田君と三人ともが帰らぬ人となったことです。二家本君は、とても研究熱心で、アメリカ史に燃えていただけにただ涙です。ご両親から寄贈いただいた岩波講座の「世界歴史全集」を見るたびに、彼の意志を生かしていきたいと思えます。



スペインの新聞「ABC (アベセ)」(1936年) から

卒業論文はスペイン市民戦争を選びました。右翼の側から見たものですが、この時の洋書は一級先輩の古屋さんが紀伊国屋におられたので、何冊か教えていただきました。私は今もスペイン市民戦争を調べていますが、主に、スペインの新聞である「ABC」と「EL PAIS」から資料を集めているので、和訳するのが精いっぱい、語学の勉強であって、西洋史の勉強といえるものではありません。ただネットからはありますが、この数年間で三千枚くらいは印刷しました。この印刷したスペイン語がスムーズに訳せるようになった時は、私のスペイン市民戦争も山登りの麓に達したと言えるかもしれません。

(文理第一六回卒・西洋史学)

研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会に対する助成要綱

(目的)

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会(以下「同窓会等」という。)に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

(助成の対象)

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

(助成の内容)

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一年度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

(助成の申請)

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書(別紙様式1)に参加者名簿(別紙様式2)を添えて提出するものとする。

(助成の内定)

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長(以下「会長」という。)はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

(報告書の提出)

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書(別紙様式3)を提出するものとする。

(助成の決定等)

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

(会報原稿の提出)

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」(以下「会報」という。)に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五行以内とする。
- (二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業年次、卒業年及び専攻を()内 で文末に表記する。
- (三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。
- (四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

(その他)

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。

研究会同窓会・同期会だより

社会学同窓会総会

宮藤 隆夫

平成二九年度・第四〇回社会学同窓会は、六月三日(土)午後四時から「防長苑」で開催された。

当日は、木下謙治、小谷典子、小川全夫、辻正二、坪郷英彦の各先生をはじめ、研究室からは、速水聖子、小林宏至の両先生は他に行事があり欠席であったが、横田尚俊、高橋征仁、谷部真吾、山口睦の四名の先生が出席された。

また、会員の出席は、昭和二九年卒から今年の卒業生まで総勢二四名と、ここ一〇年では一番多かった。このうち男性会員が一五名、女性会員は九名。また、県外からも東京をはじめ六名の会員の出席があった。今年は、先生方九名、会員二四名合わせて三三名の出席を得て、昨年以上の賑やかで活気ある同窓会となった。



総会では、弘中稔悟副会長(昭和四四年卒)が司会進行を務め、会長挨拶の後先生方を代表して小川先生からご挨拶をいただいた。その後会長が平成二八年度収支決算報告を行い、村田博監事(昭和四二年卒)の監査報告、更には質疑応答の後、当該案件が全会一致で承認された。

続いて本年四月一日付けで新たに着任された山口先生(専門分野—文化人類学)が自己紹介をされ、横田先生から卒業生の就職状況などについて研究室の近況報告があった後、総会は終了した。その後集合写真を撮り、しばし休憩の後恒例の交流会に移った。

交流会は、辻先生のご挨拶とご発声により開宴し、和やかな雰囲気の中で、先生方のお話や会員の自己紹介、近況報告にグラスを干し、出された料理をつつきながら耳を傾けた。久しぶりに出席した会員や今回初めての出席会員もあり、一同楽しいひと時を過ごした後、坪郷先生の一本締めにより閉宴となった。出席者が予想外?に多かった今年の交流会は、会員の近況報告に十分な発言時間が確保出来なかったことが悔やまれる。

今年は、二七名の卒業生を新会員として同窓会に迎えた。また、例年同窓会への出席者がほぼ固定化し、かつ少なくなってきた中で、今年の出席者が三三名と、昨年の二六名を上回ったことは、長年同窓会をお世話してきたものとして大変喜ばしい限りであり、こうした状況が続くことを大いに願っている。

最後に、社会学同窓会が発足して来年は四〇周年を迎える。アメリカの哲学者が「人は幸せだから笑うのではない。笑うから幸せなのだ。」と言っている。四〇周年の節目の同窓会を、お世話になった先生方や今年よりもさらに多くの会員のご出席を得て、皆で笑ってお祝いし、幸せになりますように。会員の皆様方の出席を心待ちしている。

(文理第一五回卒・社会学)

独文研究室同窓会

本田 義昭

八月二六日(土)の第一〇回鴻文会総会に続く懇親会の終了後、同日午後七時から湯田温泉の鈔釐庵にて独文研究室の同窓会が行われました。下寄正利先生にもご出席いただき、昭和三四年卒の益本英治さんを始め本研究室の卒業生六名および途中から合流した他研究室出身の二名の計九名で、少人数ながら和気あいあいとした雰囲気での進み、楽しい時間を過ごすことができました。

夏ではありますが鍋を囲みながら、話題は各自の近況報告に始まり、学生時代の思い出や仕事の話、趣味の話、住んでいる街の話などまで尽きることなく、途中からは別の店に会場を移して深夜まで話が弾み、大いに盛り上がりしました。中でも、当日午後の鴻文会総会・懇親会の主役だった岡光一浩前会長が八年間の任を終えてリラックスしておられたのが印象的でした。



昨年発行しました第三六号に誤りがありました。次のとおり訂正し、お詫び申し上げます。
一五頁 李 可さんの専攻名
正 言語文化専攻 誤 地域文化専攻

《住所変更連絡のお願い》

毎回かなりの郵便物が返却されてきます。住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局

Fax : 083-928-4527

E-mail:kobun1981@ybb.ne.jp

同窓会の出席者の年齢差は四〇歳以上離れており、現住所も山口県を中心に広島県、福岡県、佐賀県と広がりを見せ、日頃お互いにお交わることばなさそうですが、この席では同じ所で学んだという共通点で結ばれていました。そのせいか、今回初めて本研究室の同窓会に出席された方もすぐに打ち解けて、歓談に興じておられたようでした。普段はあまり接することがない、自分と環境が異なる人たちと交流することも同窓会の効用と言えるでしょう。

最後になりましたが、岡光前会長には長い間鴻文会をリードしていただき、大変お世話になりました。ありがとうございました。これからも、ますますのご活躍をお祈りします。
(文理第二〇回卒・ドイツ語学・ドイツ文学)

第五回 山口大学 ホームカミングデー開催

平成二九年一〇月二八日(土)、山口大学吉田キャンパスにおいて第五回ホームカミングデーが開催されました。

一〇月二八日が「東京オリンピック一〇〇〇日前」という節目の日でもあり、日本卓球協会ナショナルチームドクターでもある山口大学医学部附属病院診療教授小笠博義先生による「運動器とスポーツ」をテーマとした特別講演がありました。

第一体育館では恒例となった「湯田温泉スリッパ卓球大会 in 山大」が開催されたほか、フリーマーケットや山口大の「懐かしい写真」展など様々なイベントが企画されました。

人文学部では、OB・OG、退職教員と在職教員及び在学生が自由に交流できるよう、研究室開放が行われました。

平成三〇年度は一〇月二七日(土)開催予定です。是非懐かしいキャンパスに、山口にお越し下さい。

(人文第三回卒・西洋史学 渡邊 早苗)



共通教育棟1番教室前で
学長自ら杵を持って餅つき



上：よさこいやっさん!!とおっさん(OB・OG)の共演
横：ご近所の犬もホームカミングデーに参加



鴻文会 会員名簿利用規則

- 一、会員名簿の更新(新規入会、異動に伴う)と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。営利を目的とした利用は禁止する。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成し、事務局で保管する。

山口大学から証明書発行手数料有料化のお知らせ

卒業生及び修了生の皆様へ

山 口 大 学

卒業生及び修了生等の皆様におかれましては、平素から、山口大学の諸活動に対して格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。さて、本学では、卒業証明書及び成績証明書などの証明書については無料で発行してまいりましたが、業務コストと受益者負担の観点から、平成30年4月1日の請求分(郵送による申し込みの場合は、平成30年4月1日以降の消印による請求分)から、卒業生及び修了生等に係る証明書発行手数料を有料にさせていただくことになりました。

卒業生及び修了生等の皆様には、ご負担をおかけすることになりますが、何卒、ご理解いただきますようよろしくお願いいたします。

※ お支払い方法及び請求手続きなどの詳細は、準備でき次第、山口大学ホームページでお知らせします。また、対象者及び発行手数料は次のとおりです。

■ 対象者

卒業生、修了生、退学者及び除籍者(卒業、修了、退学又は除籍の日の属する月内に申請する場合を除く。)が対象です。また、科目等履修生及び研究生等の非正規生も対象です。

■ 発行手数料(1通につき)

和文(日本語)証明書：300円
英文：500円

【本件に係るお問い合わせ先】

山口大学学生支援部教育支援課
TEL：083-933-5150
E-mail：ga115@yamaguchi-u.ac.jp

鴻文会「賛助会員」の制度に ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一人一万円)をもとにして行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行・送付、ホームページ管理などの活動を行い、最近では山口大学同窓会との連携や「同窓会等」の開催に対する助成を開始し、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。このような中であって、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございます。

活動を支えて下さった方々のお名前を記して、お礼に代えさせていただきます。

なお、引き続き、賛助会員制度について、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。

- 平成二八年度賛助会員(順不同 敬称略)
- 多田幸子 秋村寛之 松尾正洋 上嶋美也子
 - 梅田洋二 楠瀬智枝 大塚博久 重中十士明
 - 横田由香 倉重雅子 濱村祐子 細山田康弘
 - 和田敏英 村上栄子 福原綾子 満木佑一郎
 - 小川朝子 西村晴二 宮原省吾 大内田晴俊
 - 住吉隆義 重政義宣 水本孝二 大内田薫子
 - 野村明夫 興津雅美 小野美典 田代江理子
 - 藤原秀晴 岩崎優子 大谷泰子 藤田加奈子
 - 松本英子 中村裕美 芳野奈央 椎野由紀子
 - 山岡典子 富尾諒子 藤井日正 小篠美智子
 - 野村悦子 大内崇之 塩治明江 武居スミヨ
 - 奥田和子 高崎淳子 富田一彦 岩尾より子
 - 石川哲也 岡部晶子 松田尚子 近藤勝
 - 高橋幸輔 坂本貴志 江見伸子 田中伸
 - 川崎里奈 藤井大輔 秋村寛之 村田博
 - 清水康裕 小山良昌 岡ゆみこ 奥間茂

- 中垣八朗 白石重昭 青木隆子 菊谷進
- 中村陽子 内田光邦 渡邊早苗 島越郎
- 岡光一浩 児玉典枝 山中静香 磯部薫
- 橋本学 坂正興 小野徹 伴里美
- 池佳代 金山勉 西信康 田中音
- 額縁ゼミ一同

鴻文会のホームページが 新しくなりました

少しずつコンテンツを充実させていきたいと思っています。

会報「鴻文」も第一号から掲載していますので、是非とも一度ご覧ください。

<http://kouun.kocac.ac.jp/>



編集後記

総会当日の未明に、緊急入院となり、総会には欠席のやむなきに至りました。新会長としての挨拶もできず、皆様方に心配をおかけしましたことをお詫びします。その後、退院はしましたが、今後とも、役員をはじめ皆様方に迷惑を

おかけすることになろうかと存じますが、よろしく願っています。(内田光邦)

今回から、編集に携わることになりました。還暦を過ぎて、同期の皆さん達が元気で過ごされているか気にかかっているところです。ぜひ、お元氣な声を会報にご寄稿下さい。(森重祐二)

総会で大先輩の木下さんとお会いした。恩師渡辺先生のお話で盛り上がり、後日、本号への寄稿をお願いした。時を超え、学生時代の思い出を共有する同窓会力は素敵ですね。(渡邊早苗)

卒業から三〇年が経ちました。在学は四年間ですが「縁は一生」。色々な場面での縁に助けられています。今回から編集のお手伝いをする事になりました。どうぞ宜しくお願いします。(山本明史)

今年から山口大学創成科学研究科に秘書としてお勤めしています。秘書ってなんだろう? 答えは謎のままですが、教授のお仕事を手伝いつつ我流の秘書を演じている今日この頃です。(和崎陸子)

成長が速いこと、増えすぎたことで竹で発電するという。竹の利用はこれまでもあった。いずれも皆伐のため竹が生えなかつた。小学生の時秋市の製紙工場に見学に行った。そこは一〇年で閉鎖になったそうだ。今度は続くだろうか。(大谷泰子)

月・火・木曜日の午後一時から五時まで事務の小野さんが勤務しています。付近にお越しの節には、是非鴻文会事務所(沖田ビル二階)にお立ち寄り下さい。会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。(一同)



原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会誌の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。投稿要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二一字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に、
 - ①タイトル、
 - ②氏名、
 - ③自身の顔写真一枚を文頭に置き、
 - ④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず()内 で表記すること。
 ただし①④項合わせて一〇行以内とする。
- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一七行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (六) 以上、今号の「同窓賛歌」頁を参照のこと。
- (七) 原稿は返却しません。写真は返却します。
- (八) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (九) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- (一〇) 締切りは、毎号とも九月末日とします。